Catwalk







[特集]

『心中天の網島 アクセシビリティ版』

まつもと市民芸術館
Matsumoto Performing Arts Centre

vol.
11
2026
Autumn

まつもと市民芸術館プロデュース／
木ノ下歌舞伎『心中天の網島　アクセシビリティ版』
2026年7月10日(金)～12日(日)
まつもと市民芸術館 小ホール

作：近松門左衛門
監修・補綴：木ノ下裕一
演出・作詞・音楽：糸井幸之介
出演：日髙啓介　湯川ひな　伊東沙保
　　西田夏奈子　武居 卓　緒方壮哉　大鷹明良
舞台上手話通訳：田中結夏

全国9カ所で上演

神奈川公演　6月27日(土)・28日(日)　KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉
愛知(豊橋) 公演　7月4日(土)　穂の国とよはし芸術劇場PLAT 主ホール
兵庫公演　7月18日(土)・19日(日)　東リ いたみホール(伊丹市立文化会館)
鳥取公演　7月26日(日)　エースパック未来中心(鳥取県立倉吉未来中心)
愛知(知立) 公演　8月2日(日)　知立市文化会館(バティオ池鯉鮒) かきつばたホール
東京公演　8月5日(水)～9日(日)　吉祥寺シアター
岩手公演　8月22日(土)　北上市文化交流センターさくらホールfeat.ツガワ 中ホール
新潟公演　8月29日(土)　りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館 劇場

木ノ下歌舞伎
『心中天の網島』
アクセシビリティ版

〈アクセシビリティ版 とは〉
舞台上手話通訳、舞台上字幕、音声補聴、事前解説、音声ガイドを
全会場で全公演実施しました。



「愛と死」、そして終わらない日常

Review

木ノ下歌舞伎は、木ノ下裕一が2006年に京都で旗揚げした集団である。歌舞伎の演目を木ノ下が補綴し、演出は同時代の作り手に委ねる。本作は代表作の一つで、2015年の初演、旗揚げ十年目を締めくくった2017年のロームシアター京都版に続く３度目の上演にあたる。演出・作詞・音楽は一貫して糸井幸之介。今回はまつもと市民芸術館の制作である。旗揚げ20年の節目に、６月末から８月末まで全国９か所を回った。

７人の俳優が役を演じ、コーラスも担う。幕開けの紙屋治兵衛と遊女小春の会話は、拍子抜けするほど今の言葉だ。「今の季節はなんですか」「春でーす」。反復されるやりとりに２年半が流れ、笑っているうちに、逢う時間を金で買う関係が見えてくる。ところが「紙屋の場面」では、古典の言葉が前面に出る。身代や世間体に縛られた人々が、その言葉ごとに舞台に現れる。ただし、切り替わりは必ずしも場面単位ではない。

女房おさんは、小春が一人で死ぬつもりだと察し、身請けの金を工面する。「箪笥の思い出」の場では、家財を選り分けるうち、ラブレターや指輪が現れ、夫婦の過去がよみがえる。小春を救うため、おさんは自分が築いた暮らしを差し出すのである。

道行の橋尽くしは、大坂から世界へ、ついには宇宙へと広がる。歌に誘われ、客席の心も二人の逃避行に動かされる。二人は網島に行き着き、約束通り治兵衛が刃を取る。だが、刃が小春の喉笛を外すと、痛がって逃げる身体が、死への陶酔を断ち切ることになる。治兵衛は小春を押さえ、再び刺す。愛し合う二人の物語と、男が女を殺す過酷な行為が、同じ場面に重なってしまうのである。

字幕、舞台手話通訳、音声ガイドを組み込んだ今回は、この上演を受け取る客席のあり方も変える。現代語、古典語、歌を往還する表現に、文字や手話や音声という経路が加わる。字幕を読む人、手話を見る人、音声ガイドを聞く人が、それぞれの仕方で同じ上演に立ち会うのである。この支援を特定の回に限らず、全国９か所の全公演に用意した。まつもと市民芸術館の芸術監督団団長でもある木ノ下が掲げる「公共性」は、誰を観客として迎えるのかという、劇場の具体的な選択として実装されたのだ。

そして幕切れ。二人の死を包む歌が終わり、組み直された紙屋におさんが戻り、子に寄り添って眠る。小春を救おうとした時も、二人が死んだあとも、暮らしを支えるのはおさんだった。悲恋が終わっても、残された者には生きる時間が続くのだ。高揚のあとの日常は、愛の物語を成り立たせる負担が誰に偏っていたかを露わにする。愛と死のあとを、誰が引き受けるのか。おさんは、その問いを観客に手渡すのである。

演劇批評 **内野 儀**

Photo : Aki Tanaka



まつもと市民芸術館プロデュース

『松本のオフィーリア』

REVIEW

8月、まつもと市民芸術館を訪れた。メインエントランスに向かって歩くと、館内に吊るされた色とりどりの七夕人形が目に入ってくる。「松本は旧暦で七夕を祝うと聞いたことがあるな」と思いつつ「松本のオフィーリア」の客席につくと、今度は舞台上に吊るされた大きな七夕人形が目に飛び込んできた。「あれ、もうすでに芝居は始まっているのかもしれない」……そう思うのと同時に舞台が開演した。

本作では、戦前から戦中にかけて旧制松本高等学校で起きた思想弾圧事件「松高事件」をモチーフに、時代を濃く生きた若者たちの姿が描き出される。と書くとシンプルな構成のようだが、そこは大筆小筆を使い分けて、ダイナミックな画を描く益山貴司のこと、17歳の桜子に松本で暮らす祖母のハルが、七夕にちなんで悲恋の恋人たちの思い出話を語り聞かせるという枠組みの中、盆舞台を駆使して現代と過去を行き来しながら、自らの信念と現実の狭間で喘ぐ若者たちの姿を、愛ある筆致で描き出す。

1940年の松本に生きるハルと東京で歌手になる夢を持つキヨは、おきな堂で女給をしている。カフェには全国のエリートが集まる旧制松本高等学校の学生たちが足繁く通っていて、博ら松高生たちの誘いにより、キヨとハルは「ハムレット」の舞台に立つことになる。しかし彼らの本当の目的は、政府が推進する国民精神総動員運動に反旗を翻すこと。その流れに巻き込まれて、キヨはオフィーリアさながら、





まつもと市民芸術館プロデュース『松本のオフィーリア』
2026年8月27日(木)～30日(日)
まつもと市民芸術館 小ホール
作・演出：益山貴司
出演：髙橋彩香　中野亜美　神野幹暁　東 倫太朗
　　櫻井拓斗　細川貴司　平栗あつみ





薄川（すすきがわ）に身を投げ、悲しい最期を迎えるのだった。

益山はこれまで、大阪の大川（旧淀川）で土地の歴史に着想を得たクルーズ演劇や、京都大学の歴史ある吉田寮食堂でブレヒト「三文オペラ」を上演するなど、場と物語の力を絡ませた、力強い作品を多数生み出しきた。その手腕は本作でも光り、松本という土地の歴史、「ハムレット」という物語の力、俳優たちの躍動する身体といった多数の要素を繊細な糸で縫い合わせ、唯一無二の物語を立ち上げた。また〝松本でしか創れない〟芝居をという思いで、フィールドワークを重ねて作り出したという本作には、七夕人形や薄川など随所に松本を彷彿とさせる要素、松本の言葉が織り込まれていて、終演のころにはすっかり松本が愛おしくなっていた。個人的には、まつもと市民芸術館が主催する、世界を目指したダンス人材を育成するプログラム、Step Mの育成対象者で振付家・ダンサーの櫻井拓斗が、俳優として生き生きと舞台を駆け巡る姿が心に残った。

ライター **熊井 玲**

photo:Takeshi Yamada

ひらく古典のトビラ其の7

1月24日開催！

『信濃でたっぷり楽しむ能の会』

1月の公演に先立ち、木ノ下裕一団長と、観世流能楽師の田茂井廣道先生にお話を聞きました。

木ノ下　松本で能の公演を、と思った時に田茂井先生のお顔が真っ先に浮かびました。舞台の素晴らしさはもちろんのこと、能の普及についてもとてもお考えになっていて、そのための努力と手間を惜しまないところが大好きなんです。先生の公演は能を初めて見る方への工夫も手厚いですよね。

田茂井　わかる・わからないということと、好きか嫌いかということは本来全く別物であるはずなのに、なぜか古典芸能、特に能に関してはわからなければいけない、わからないイコール楽しめない、と思っている人がすごく多いんです。あと日本人の特徴としてわからないことは恥ずかしい、だから見に行かないという人もすごく多いんですよね。これを取っ払いたい！そして能を好きになってくれたら、というのが一番です。

木ノ下　今回の番組のおすすめポイントを教えてください。

田茂井　せっかく信濃でさせていただくので〝信濃に関わるもの〟。なので、能「望月」と舞囃子「山姥」が中心に来ています。信濃を軸に、能が持っている「神男女狂鬼」という五番立ての様々なジャンルの演目をミックスして、能として楽しみ、また信濃というものを感じていただけるように組みました。バラエティに富んだ演目を並べ、一日見たらなんか能って面白かったな迫力あったな、また見たいなと思ってもらえるようにできたらいいなと。

木ノ下　素晴らしいです。一番のメインは先生がお勤めになる望月だと思いますが、この望月への伏線も前半にいっぱい張っているんですよね。

田茂井　裏テーマは〝仇討ち〟です。仇討ち物として、「小袖曽我（こそでそが）」と「放下僧（ほうかそう）」、そして「富士太鼓（ふじだいこ）」などの仕舞。小袖曽我は曽我兄弟の仇討ち、放下僧は望月と兄弟のような曲で、芸を見せて仇を油断させ、寝込みを襲って本望を遂げる、という望月と同じ作りなんです。あと富士太鼓、これも仇討ちなんですが、仇を討てない。太鼓をめぐる争いで夫が殺されて妻と娘が残される。遺児が女の子で仇を直接討てないから、太鼓を打つことでその思いが晴れたことにする、という曲です。対する望月はというと、同じように夫を殺された妻と子供が出てきますが、こちらは遺児が男の子で、仇を討って本望を晴らします。この望月と富士太鼓の対比も面白いかなと。また、望月に蝉丸のエピソードが出てくるので蝉丸も。

木ノ下　信濃の景色が出てくる演目もたくさんありますね。

田茂井　杜若には伊勢物語の在原業平の東下りを語る場面で「浅間の嶽」（浅間山）が出てきます。柏崎と山姥は善光寺に詣でる話、巴は木曽義仲の話ですから信濃です。高砂は信濃とは関係ないですが神様の曲で、能はもともと神様に捧げる、神様とは切っても切れないものなので最初に入れました。

木ノ下　今回8番ある仕舞はどう楽しんだら良いんでしょうか。

田茂井　仕舞は衣装や能面を使わないので、登場人物がどんなキャラクターかわからない。演目の途中から始まってものによっては途中で終わるし。予備知識がなかったらまずわからないんです。結局、仕舞を楽しめる人は能を知っている人なんですよ。全体像がわかっていて、この部分をやっているんだという理解で見られたら楽しめる。だから全く能を知らない人にとってはわかりにくいものであるということは否定しようがない。ただ良いところは短いこと。能を丸々見たら1時間以上かかりますが仕舞はだいたい数分、短ければ1、2分で終わります。役者の素顔で出てくるので素の良さがよくわかる。この人はこんな舞い方するんだ、こういう体の線があるんだ、とかが見えてくるので、役者を見るには能より仕舞のほうがよりわかります。

木ノ下　そうですね。摺足の美しさとかちょっとした動きの切れ味みたいなものはやはり仕舞のほうがワッと迫ってきますもんね。

田茂井　仕舞の解説をする時には、とにかく出てきた人が誰でここがどこなのかという部分だけはまず説明するようにしていますが、あとはお客さんに任せるしかないなと思っています。

木ノ下　そして後半は望月をがっつりご覧いただこうと思いますが、望月の魅力っていかがでしょうか。

田茂井　望月は能の中で、純粋にお芝居として楽しめる名作です。例えば井筒や杜若などの美しい幽玄な女性の姿で舞うのも能らしいけど、ともすれば退屈になる。お客さんが楽しんでもらえるものを提供したい時に、望月が一番いいかなと。信濃つながりでもありますし。また能って間の芸能だと思うんですよ。丁々発止する間、満ち足りた静謐な間、色んな間があってその空間、空白を楽しめる曲でもあると思います。後半の見せ場は、素手で出てきて獅子頭をつけて舞う場面になりますが、今回取り囲むような客席なので能舞台とはまた違う面白い展開になるんじゃないかなと思っています。

　また、今私の思い描くほぼこれ以上ないぐらいのベストメンバーが組めた舞台なのですごく楽しみです。

木ノ下　本当になかなかこのメンバーは揃わないですから。県外からもぜひ見に来てほしいですね。



田茂井廣道（たもいひろみち）　能楽シテ方観世流能楽師。準職分。重要無形文化財（能楽）保持者。海外公演にも多数参加。「碧道会」主宰。



「望月」

信濃安田友春の遺臣小沢友房は近江守山に潜伏し宿屋を営む。そこに亡き君の妻と子花若が宿泊し再会を喜んでいると、偶然主人の敵である望月秋長が宿をとる。妻は盲御前、花若は稚児に扮し友房は獅子舞を舞い、虚をついて敵を討つ。



■公演詳細は14ページ

飛び出す！芸術監督団

令和8年度後半は主ホール、小ホールとも改修工事による休館のため、劇場をとびだして様々な公演をおこないます！

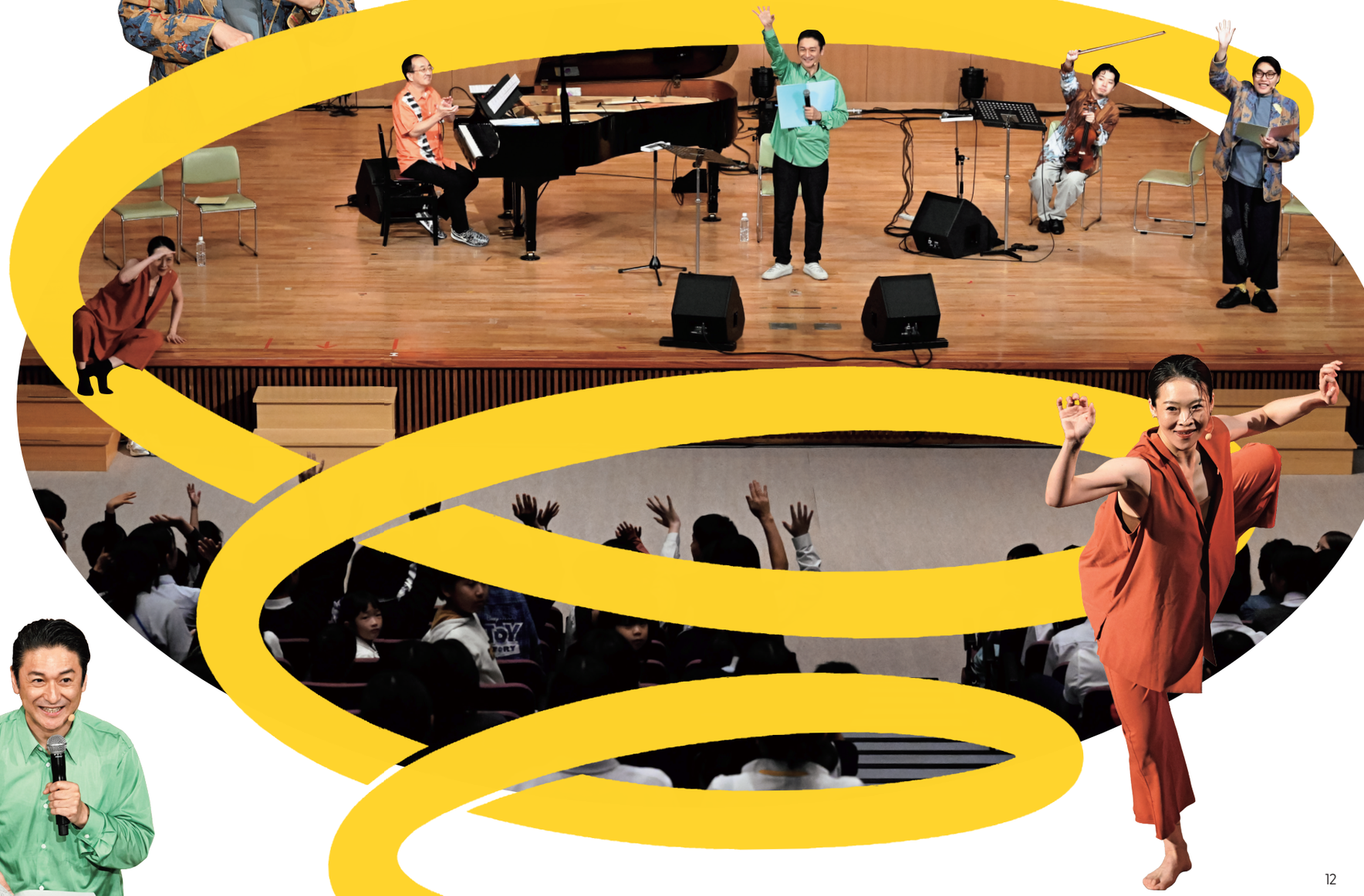
おでかけ版『はじめまして！』

9月16日、山々に抱かれた谷深い松本市奈川地区にある奈川文化センター夢の森で、安曇・大野川・奈川3地区の小中学生およそ100名及び学校関係者を対象とした、アウトリーチコンサートお出かけ版『はじめまして！』が開催された。出演はまつもと市民芸術館芸術監督団の石丸幹二、木ノ下裕一、倉田翠、そしてクリヤマコト（pf）、林周雅（vl）。当日は地域住民も招待され、会場は空席を見つけるのが困難なほどの熱気に包まれた。

プログラムは、出演者が自らの職業について語る「わたしの仕事は？」や、「信濃はふるさと」をテーマにしたコーナーなど、1時間ながらもりだくさんの内容。木ノ下が信濃出身の作詞・作曲家による唱歌等を紹介。倉田はダンスでクリヤのピアノとの即興セッション。石丸は、武満徹の『小さな空』や坂本九の『心の瞳』を情景豊かに歌い上げ、県歌『信濃の国』では、生徒たちが立ち上がり会場一体となって合唱した。ライブ感があふれるひとときに、会場を出る生徒たちには笑顔と高揚感が溢れていたように見受けられた。







劇場を飛び出して、音楽を必要としている人のもとへ

9月17日、まつもと市民芸術館のゼネラルアートアドバイザーの石丸幹二が、まつもと医療センターを訪れました。石丸は、ヴァイオリンとピアノの演奏と共に、石丸の歌声を添えた約40分のミニコンサートを披露。今回のお客さまは、重い障害があり、日々を病院で過ごす患者さんたちです。

人工呼吸器などの医療設備を必要とする方も多く、看護師や医師の皆さんとともに迎えたコンサート。どうすれば無理なく楽しんでいただけるだろう。私たちスタッフにとっても初めての試みで、手探りのまま当日を迎えました。

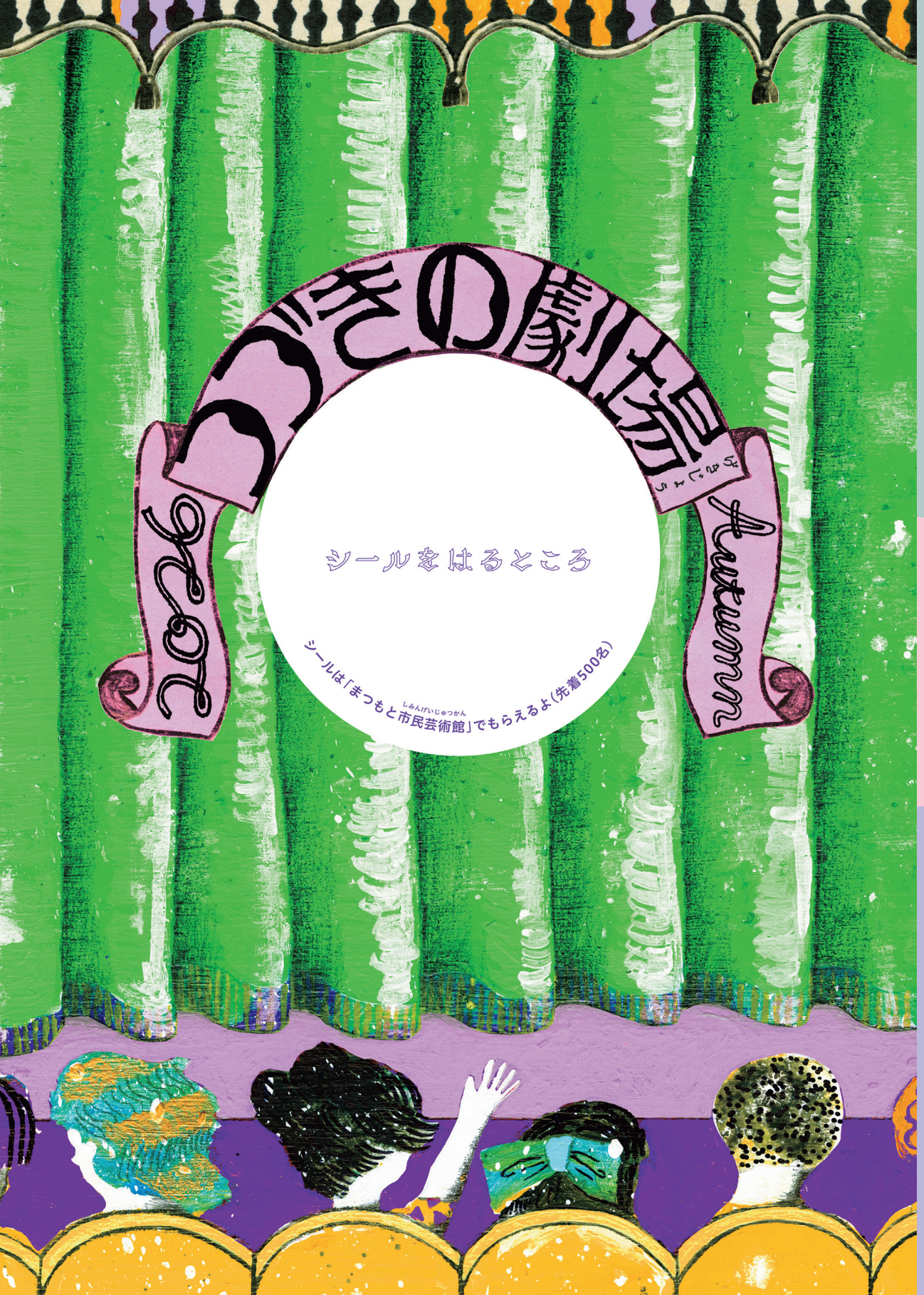
けれど、集まった皆さんの表情から伝わってきたのは、この日を待ちわびていた喜びでした。言葉や表情でその気持ちを表すことが難しい方もいます。それでも、会場に音楽が響き始めると、一人ひとりの中に音楽が届いていることを感じる瞬間がありました。音楽は確かに皆さんのもとに届いていました。また、病院スタッフの皆さんの協力のもと、会場に来られない多くの患者さんにもライブ配信で音楽を届けることができました。

音楽を届けに行ったはずが、私たちのほうが、たくさんの喜びとエネルギーをいただいた一日。劇場の外にも、音楽と出会う場所が広がっています。

おでかけ版『はじめまして！』
2026年9月16日（水）
奈川文化センター夢の森 コンベンションホール
出演：石丸幹二　木ノ下裕一　倉田 翠
　　クリヤ・マコト　林 周雅

『石丸幹二ミニコンサート inまつもと医療センター』
2026年9月17日（木）
まつもと医療センター
出演：石丸幹二　林 周雅　萩森英明

photo:Takeshi Yamada



Information

まつもと市民芸術館 芸術監督団 シアターパーク企画

ひらく！ とびだす！ シアターパーク
～まなぶをあそぶ～

主ホール、小ホールの改修工事期間中、2階ロビーの「シアターパーク」を中心に、
劇場の新しい楽しみ方が広がる様々な企画をお届けします。こどもからシニアまでどなたでも集える、
新しい「まなびのあそび場」を一緒につくっていきましょう！

寺子屋ごっこ

木ノ下裕一 芸術監督団 団長／芸術監督【演劇部門】

木ノ下裕一とゲストによる、読書会とレクチャー。課題図書を読み解く金曜夜の読書会と、土曜の対話形式の講座を通じて、「ことば」とじっくり向き合い、「かんがえる」ことで他者と「つながる」方法を探ります。

❶11月13日（金）、14日（土）
ゲスト：嘉数道彦（沖縄県立芸術大学 准教授）

❷12月４日（金）、５日（土）
ゲスト：児玉竜一（早稲田大学演劇博物館 館長）

❸2027年２月26日（金）、27日（土）
ゲスト：池澤夏樹（作家、詩人、翻訳家）

※無料（要事前申込） ※読書会は課題図書要持参

からだとすごす

倉田翠 芸術監督【舞踊部門】

倉田翠が、シアターパークを〝からだとすごす〟場所としてひらきます。気軽にからだを動かしたり、音楽の中で思い思いに過ごしたり。からだのための時間を一緒にすごしましょう！

「朝の体操クラブ」

姿勢を意識すること、硬くなった身体を緩めること、簡単なストレッチや軽い筋トレなど、家でも続けられるようなメニューを考えています。運動が苦手な方、身体が硬い方、シニアの方も大歓迎です！

[日程] 11月～2027年３月 毎月１回
[会場] シアターパーク

※無料（要事前申込） ※１回からお気軽にご参加いただけます。

「１日ダンスフロア」

月替わりの音楽と楽しい明かりの中、どなたでも自由に過ごせるイベントです。好きに踊るもよし、ストレッチするもよし。ぷらっと立ち寄るだけでも大歓迎！ 倉田も開催時間中ずっと踊っています。

[日程] 11月７日（土）、12月19日（土）、2027年１月30日（土）
各回13:00～17:00（出入り自由）
[会場] シアターパーク

※無料（申込不要）

ものがたりを読む（映像）

石丸幹二 ゼネラルアートアドバイザー

昔話や伝承など、日本にはさまざまな「ものがたり」があります。その中で、近代の作家たちが少年少女向けに書いた「ものがたり」の多くは、書籍の絶版などにより、人びとから遠ざかっていくように思えます。そんな忘れ去られてしまいそうな「ものがたり」の中で、自然との共生や古き良き日本・日本人を語る作品を、月替わりで石丸幹二がお届けします。ものがたりを「こえ」でじっくり「きく」ことで、心と体に何かが「ひびく」体験を。

[日程] 11月６日（金）～2027年３月28日（日）
8:30～閉館時間まで視聴可

※休館日を除く ※約１ヵ月で朗読作品が変わります

[会場] シアターパーク内特設ブース

※無料（申込不要）

その他

「Step M」Dance Workshop

倉田翠が指導するダンス作家育成プログラム「Step M」の育成ダンス作家と倉田による、ダンスワークショップを行います。小学生も大人も、ダンス未経験の方もダンスに苦手意識がある方も、Let's Step！

❶11月７日（土） 櫻井拓斗「こども乱舞」
❷12月19日（土） 宮 悠介「からだ⇆うごき⇆おどり」
❸12月20日（日） 倉田 翠「身体表現クラブ」
レクチャーワークショップ
❹１月30日（土） 女屋理音「かわるからだからわかる」

※要事前申込 ※③④有料



■申込・お問い合わせ
まつもと市民芸術館チケットセンター（10:00～18:00）
[電話] 0263-33-2200［窓口］まつもと市民芸術館１階

ここは「つづきの劇場」です。役者たちに 色と セリフが まだ ついていません。

続きを かいて 劇を 完成させてください。完成できたら 金メダルシールを もらえます。

Information

11月7日発売

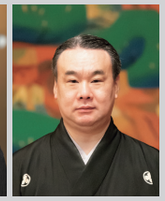
ひらく古典のトビラ 其の7
『信濃でたっぷり楽しむ能の会』

1月24日(日) 13:00
キッセイ文化ホール 大ホール

演目：仕舞『高砂』『富士太鼓』『小袖曽我』『蝉丸』
『巴』『杜若』『柏崎』『放下増』
舞囃子『山姥』
能『望月』
構成・出演：田茂井廣道
企画・進行：木ノ下裕一

料金：全席指定（税込）
一般 ¥4,500／U25 ¥1,500／
障がい者割引 ¥4,000

※未就学児入場不可
※U25（25歳以下）チケットは
枚数限定・前売のみ、
また当日年齢確認証を
ご提示ください。

12月12日発売

ひらく古典のトビラ 其の8
『木ノ下亭』

2月11日(木・祝) 14:00
信毎メディアガーデン

出演：［浪曲］奈々福（浪曲師）　広沢美舟（曲師）
［瞽女（ごぜ）唄］広沢里枝子
お話：釈徹宗
席亭：木ノ下裕一

料金：全席指定（税込）
一般 ¥3,500／U25 ¥1,500／
障がい者割引 ¥3,000

※未就学児入場不可
※U25（25歳以下）チケットは
枚数限定・前売のみ、
また当日年齢確認証を
ご提示ください。






《障がい者割引の注意事項》
・当日障害者手帳をご提示ください。
・移動に介助が必要な方には、介助者１名につき一般料金の50％を割引いたします。

『Catwalk／ねこあるき』Vol.11

2026年11月6日発行

発行　まつもと市民芸術館
〒390-0815
長野県松本市深志3丁目10番1号
Tel 0263-33-3800 Fax 0263-33-3830
E-mail mpac@mpac.jp
URL https://www.mpac.jp

デザイン　清水貴栄・小林慎太郎
印刷　藤原印刷株式会社
＊禁無断転載

■郵送サービス

『Catwalk／ねこあるき』の郵送をご希望の方は、郵送費用分の切手（1号180円）を下記へお送りいただければ送付いたします。その際、お名前・ご住所・何号をご希望かを必ずご明記ください。

〒390-0815 長野県松本市深志3丁目10番1号
まつもと市民芸術館 広報誌担当 宛

『Catwalk／ねこあるき』は、まつもと市民芸術館のほか、市内公共施設、市内飲食店、全国の劇場施設などに置いております。

■チケット購入・お問い合わせ

［まつもと市民芸術館チケットセンターのご案内］
①電話 0263-33-2200（10:00-18:00）
②インターネット https://www.mpac.jp
（要事前会員登録・無料）
③窓口 芸術館1階（10:00-18:00）

［芸術館チケットクラブのご案内］

※まつもと市民芸術館ホームページよりご登録ください。
※インターネット予約が可能（一部公演をのぞく）。
※メールマガジンにて最新のチケット情報や公演案内を配信。

■アクセス

【バス】JR松本駅お城口（東口）より、
駅前バスターミナルから「市民芸術館前」下車

【徒歩】JR松本駅お城口（東口）から
「あがたの森通り」を東へ800m、徒歩10分

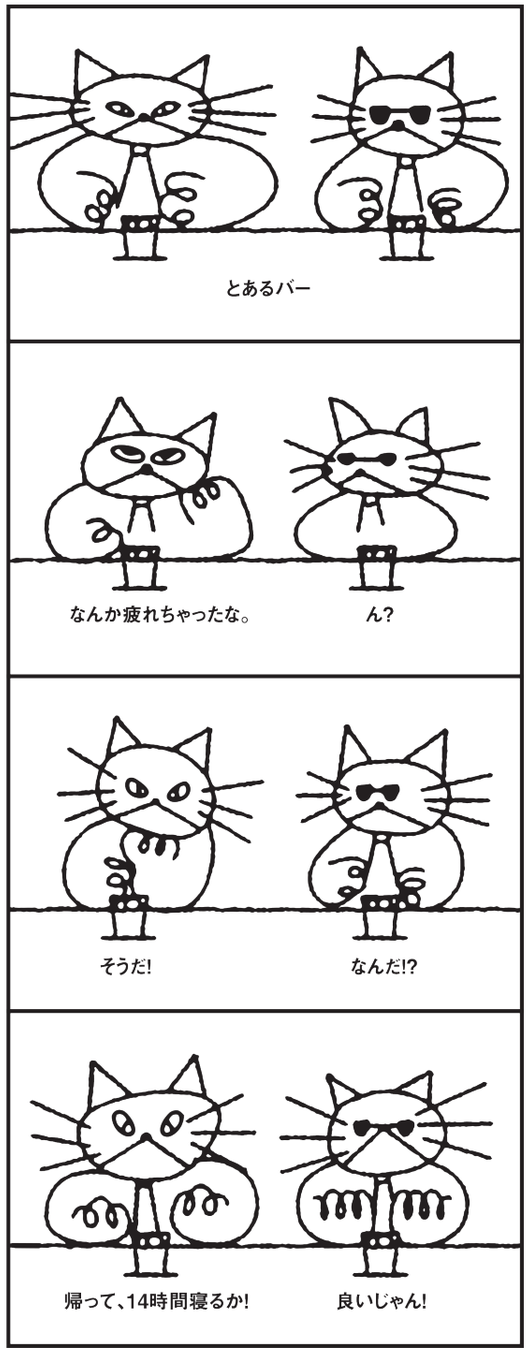
※駐車場の用意はございません。
公共交通機関や有料駐車場をご利用ください。
※近隣商業施設等への無断駐車は
他のお客様のご迷惑になりますのでご遠慮ください。

『Catwalk／ねこあるき』は、まつもと市民芸術館の広報誌です。『Catwalk』は芸術館の情報『ねこあるき』は街の情報を中心に紹介し、両側から読めるようになっています。またCatwalk（＝キャットウォーク）とは、劇場のステージや客席の上のスタッフしか歩くことのない細い回廊のことを言います。



それでも、猫が好き。

小島 有



焦らず、自分らしく、ゆっくりいこうぜ！

3つの国、3つのステージ、3世代。
笑顔がつながった一日



８月11日、「３つの国を３つのステージで３世代で遊びつくせ！」を合言葉に開催した「さん さむさんシアターフェスティバル」。東アジア文化都市2026松本の一環として、日本・中国・韓国の人形劇や伝統芸能が集まり、約950名の来場者で会場はにぎわいました。

中国からは、長い歴史をもつ京劇の技法のひとつ「変面」が登場。鮮やかな衣裳と一瞬で表情が変わる不思議なパフォーマンスに、客席からは驚きの声が上がりました。韓国から招聘した劇団「相思花（サンサファー）」によるステージでは、子どもたちも人形遣いに参加。舞台と客席が一体となり、大いに盛り上がりました。

日本からは、地域で活動する小さな人形劇の担い手たちが集結。また、飯田からは人形浄瑠璃の伝統を受け継ぐ黒田人形が登場し、300年続く人形文化を多くのお客さんが堪能しました。

さらに小ホールでは、聴覚障害のある方も一緒に楽しめるデフ・パペットシアター・ひとみの「クラバート」を上演。

国や世代、障がいの有無を越えて、人形劇を通じてみんなが同じ舞台を囲み、笑い、楽しんだ一日となりました。





撮影：山田毅

芸術館ゆかりのアーティストが選んだ

松本うまいもん

チーズが好きでちくわが好きでわさびが好きだ！ならばコンバインされたこれが好きじゃないはずがない。ワークショップアシスタントの植田崇幸と帰りの特急あずさで必ずこれとビールを駅前のニューデイズで買って車内で飲む。最高すぎて泣ける。わさびの涙じゃない。幸福の涙である。植田は私と酒を飲んでいる時「あぁ幸せやぁ」と頻繁につぶやく。彼と毎年松本に来るようになって、この幸せの瞬間がたまらない。お互い、一度ずつ車内で号泣したことがある。最初に私がとある繊細なことがらで泣き、その１ヶ月後くらいに彼がWS参加者の頑張りを思い泣いていた。ちなみに「一本あげる」と言いつつ結局私が二つとも食べてしまう。うまいんだもん。

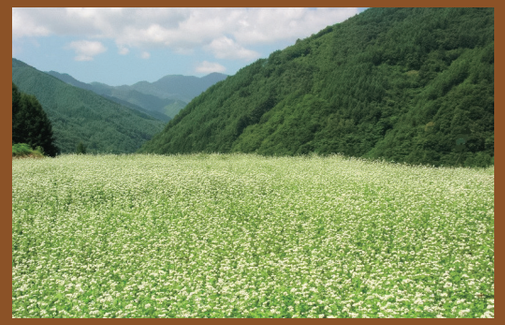


山本卓卓（やまもと・すぐる）

劇作家・演出家・俳優。演劇集団範宙遊泳代表。山梨県生まれ。観客の倫理観を揺さぶる劇世界を、加速度的に変貌する現代情報社会とともに構築している。2027年１月～３月に毎年恒例の中高生対象の演劇ワークショップ「新しい演劇の作り方」を開催！



信州と蕎麦





写真提供＝ふるさと奈川観光交流部

秋は新蕎麦の季節。あちこちで「そば祭り」などのイベントも開催されます。

信州といえば「蕎麦」というイメージがありますが、標高が高く、水はけがよい痩せた土地で良い蕎麦がとれるそうで、信州が蕎麦の名産地になったのは栽培条件が適した土地だったからと思われます。また、冷涼な気候と昼夜の寒暖差が蕎麦の風味を引き立てるそうです。県内では戸隠や飯山、開田高原、松本市内では奈川、乗鞍高原が蕎麦の産地として有名です。

蕎麦切り発祥の地は木曽の本山宿(現在は塩尻市)、といわれています。安土桃山後期にはじまり、江戸時代にその技術が全国に広まりました。それ以前は現在の麺状ではなく、そばがきのような形で食べられていたようです。

奈川地区で古くから伝わる伝統の味が「とうじそば」です。山菜やきのこ、野菜を煮た鍋に「とうじかご」に入れたそばをとうじ、さっと温めていただきます。

ぜひ信州で好みのお蕎麦を見つけてください！

綴る「まつもと、景の声」



現在の信州大学前の道。
信大生が行き交う

［ 信大前編 ］

松本に暮らす人々にかつての街の風景について取材をし、創作した演劇作品「まつもと、景の声」は、2025年２月、まつもと市民芸術館２階のオープンスペースで上演されました。「まつもと、景の声」の構成・演出を担当した藤原佳奈が、その派生企画として、松本の今と昔の風景について綴っていきます。

追分の家から旭町小学校までの通学路は、見渡す限り田んぼだった。昭和20年前後、その道を歩いていた女性から話を伺った。

1908年から歩兵第五十連隊が松本に駐屯するようになった。今の信州大学の松本キャンパスの敷地である。今の信大病院になっているあたりに、その兵舎があった。戦争中は、しょっちゅう空襲警報のサイレンが鳴り、電灯の光が漏れてはいけないと、黒い布をパッと被せた。松本には白い土蔵が多い。白いと飛行機から狙われてしまうからと、灰や墨を使って、皆で壁を黒く塗った。全部は塗りきれないので、迷彩のように斜めに塗ったりして。戦後、白く塗り直したそうだが、話を聞いた後、町を歩いていて、いまだに墨が残った土蔵をいくつか見つけた。戦後の松本の街には、傷痍軍人の人たちが辻ごとに立っていた。片足を失い、松葉杖をついて、歌をうたう。片腕のない人が、片手でハーモニカを吹く。

よく映画で見るあの光景は、松本の町でも当たり前にあったと聞いて、自分が暮らす土地と戦時中の空気が地続きになる。薄汚れた傷痍軍人の物乞い姿は、日常の風景で、見て見ぬふりをする人も多かったらしい。

五十連隊の兵舎には進駐軍の人たちが駐留するようになった。門のところにちょっとした日よけのような建物があって、その前にいつも二人、立っているのだという。

「ヘイ」と声をかけてくる。今はもう本当に嫌な思い出なんだけど、と前置きをして、彼女は、「ギブミーチョコレート」なんて言って、友達とチョコレートやチューインガムをもらってたわね、平気で。と言って、苦い顔をした。

取材の終わりに、彼女は何か閃いたように、こう言った。

「進駐軍の二人はシワひとつない、パリッとした軍服をきてたのね。そのズボンの折り目が、ピンと縦に立ってたの。靴なんか全然覚えてないけどズボンの折り目が、うんと綺麗だったことを覚えてる」

私はこの話を聞いてから、信大前を通るたび、小学生だった彼女の視線がとらえた、進駐軍のズボンの折り目を、想像する。

藤原佳奈　戯曲作家・演出家。わたしたちの〈はたらき〉を聴き、上演の場をひらく。2020年より長野県松本市在住。2024年秋より、劇場実践の場「松のにわ」を始動。毎月最終水曜日に出居番丸西で「米はある！」を主催。多分野で協働しながら、身体へのまなざしを分析し、再編を試みる「アートプロジェクトひとひと」を進行中。

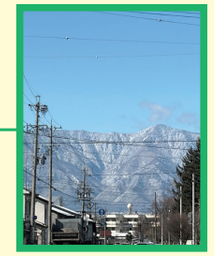
まつもと暮らし

松本に移住された方を紹介する企画。今回は、松本城の近くで、焼き菓子店「菓子壱／KASHI ICHI」を営む、朝吹 太（たいち）さんにお話を聞きました。



aL coffee&bake

仕事前の毎朝、決まってコーヒーを飲めることに感謝です。



冬の澄んだ空の松本の山

お店の近くから見える山並み、山を見て落ち着くのは大人になった気がします。



／ いつでも勝負の気持ちを忘れずにいたいです ＼



景色

いつも色んなお話を聞いたり、聞いてもらったりできる場所です。

移住のきっかけ

霧ヶ峰の山小屋や松本市には小学生の頃から毎年連れてきてもらってました。引っ越しが多く、関西から北海道、東京やらフランスやら、いろんな場所を転々と。コロナ禍を経て、果物農家さんとの距離が近く、東京との往復もできて友人とも会える、気温も人の数も自然も丁度良い。そんなところに惹かれて、勢いで移住しました！

松本の印象

知人も友人もゼロで引越し、お店に通っていたら、顔馴染みが沢山！ 初めての人や他所の人にも良くしてくれる都会的？ なところと、顔馴染みになれば尚仲良くしてくれる田舎としての良さ。その両方があるのが、松本の面白いところだなと思います。

料理や食事は、とにかく素材が美味しい。知人が遊びに来てくれた時におすすめしたいお店はいくらでもあって、毎回どこを紹介するか困ってます！

普段の過ごし方

好きが転じて仕事になった口なので、休みの日も仕込みをしていたり、お店にいたり。合間を見つけて、気分転換に、油を売りに、知り合いのお店に顔を出したりしています。サクッとコーヒーを入れに**aL coffee&bake**、少し時間があれば**raula coffee& more**、お昼は**the source diner**、営業後の仕込みの合間や後に軽く、**景色**、**Inter play**に寄ったり、文字数制限がなければ、もっと書きたい！時折、東京にお菓子の講習会へ行くのも楽しみです！

お店のことと今後やってみたいこと

移住して早くも６年目。どうにか日々生活させてもらってます。本当はもっと作って、食べてほしいお菓子が沢山あります。ただ、時間と生活のためのバランスとかで、まだ作れていないものも……。なので、一年一年少しずつ。色んなことを改良しながら、いいお菓子屋さんにしていけたらと思っています。

朝吹 太　1994年生まれ、戌年。渡仏後、お菓子屋、珈琲屋で勤務がコロナ禍の2020年に東京から移住して、菓子店を始める。
kashi ichi　〒390-0873 長野県松本市丸の内9-24　11:00-16:00　火・水定休　Instagram @kashi_ichi

















Step M
奈川獅子を舞う！



令和７年９月、監督団とStep Mのメンバーが訪れた「奈川獅子」。今年は女屋理音と宮悠介が練習から本番まで参加させていただきました。その様子を倉田監督の言葉で振り返ります。

「Step M」は海外を視野に入れた幅広い活動ができるアーティストを育成する５年間のプロジェクトです。グローバルに活躍するアーティスト、とはなんでしょうか。私も指導者として自分が出来ることは何かと考えてきました。

海外で活躍するために、海外のことに詳しくなれば良いのか、「海外」という曖昧な言い方も引っかかる。広い視野とは何か。まず、近くて遠いものを知りたいと感じることが重要なのではないかと考えました。

奈川獅子の存在を知ったのは、芸術監督就任１年目の監督団視察の時でした。お話を伺った奥原さんが保存会の方で、奈川獅子への熱い想いを聞かせていただきました。後継者不足に困っている、と伺い、軽い気持ちで、「若手のダンサーたちを送り込めたら面白そうですね！」とお話したことを覚えています。

翌年、Step Mも本格的に動き出し、監督団とStep Mメンバーとで奈川獅子を見に行きました。初めて見る奈川獅子の迫力、面白さ、またこの行事が脈々とこの土地で受け継がれているということに感銘を受けました。

「文化」は、どこにだってある。劇場や美術館だけに芸術があるわけではない。

そして今年、Step Mアーティストの女屋理音、宮悠介の２名が、奈川獅子のお稽古と本番に参加させていただくことになりました。

初めての稽古の日は、私も同行しました。続々と地域の方々が集まってきて、慣れた様子で稽古がスタート。詳しい説明はなく、見様見真似で舞についていく。子供たちや指導者の方々が不慣れなアーティストたちに声をかけてくださる。

二人は、週２回レンタカーで奈川まで通い稽古に励みました。

中盤の稽古に一度お邪魔した時、二人がすっかり地域の方々に馴染んでいる様子、また、舞の上達を見て、彼らがここで過ごした「時間」を感じました。

私自身、アーティストとしてこれまで様々な分野、立場の方々と出会ってきました。本番では見せることのできない感動的な瞬間や何にも代え難い時間を経験してきました。

きっと彼らは、二人しか知り得ない体験をここでさせていただいたのだろうと想像しました。

それらの経験は、形を変え、自分たちの身体に宿り、必ず作品を作る手助けになってくれると私は思っています。

奈川獅子本番。二人の真剣な表情、堂々とした舞を見て、涙が溢れました。この奈川という土地で、親から子へと継承され続けてきた奈川獅子に、劇場で海外を目指し四苦八苦しているアーティストたちが混ぜていただいているということ。

私は、奈川獅子のテクニックを彼らに習得してもらいたかった訳ではありません。すぐ近くに、このような文化があり、そこに「よそ者」としてお邪魔させていただくこと。リスペクトを持ち、真剣にその歴史に関わらせていただくこと。近くて遠い知らないものに出会うこと。そこに、自分がどのように存在することができるのか。そのようなことが、広い視野を持つ第一歩ではないでしょうか。

本番後、指導者の方が、「りおん（女屋）もユッケ（宮）も、自分の舞方を見つけてくれた。奈川獅子は踊りではない。上手にやったって仕方ない。心が大事なんだ。二人ともそこまでやってくれた。」と言ってくださいました。

この言葉は、これから彼らがアーティストとして生きていく中で、きっと力になってくれることでしょう。

最後になりましたが、二人のアーティストを快く受け入れてくださいました奈川獅子保存会の皆様、地域の方々、本当にありがとうございました。また強くなって戻ってこられますよう精進いたします。

倉田 翠



Photo : Takahisa Kobayashi（左下・右中）

ができる。その時間も含めて店で味わってほしい。だから、お客さんがどんなふうに過ごしているかも、だんだん店づくりに影響してくると思います。

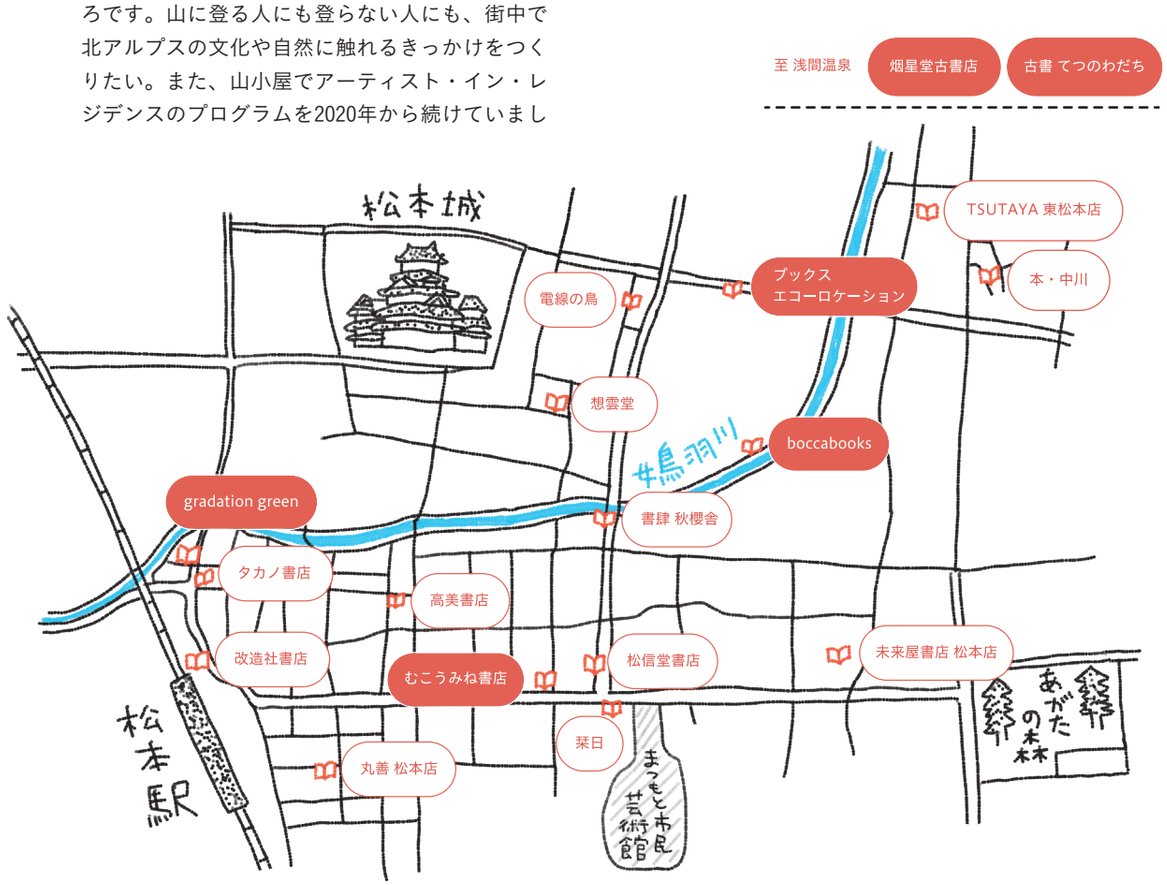
――では、その「表現の場」を、これから街や人にどう開いていきたいですか。

五十嵐　うちの店は広くないですが、ギャラリースペースも用意しています。「使ってみたい」という人の表現の場にもなればと思っています。本を買いに来るお客様が、同時に絵や写真とも出会っていただけたらうれしいです。また、読書会も月１回を目安に開催しています。私自身が、読書会で本の新しい楽しみ方を知りました。読んだ感想を自分の言葉で誰かに話す楽しさ、人の話を聞いて刺激を受ける面白さが感じられる会にしていきたいです。展示や読書会なども含めて、普段の暮らしの中でぶらっと立ち寄れる場所でありたいです。

小谷田　うちの店舗は１階がカフェ、２階が古書店、３階がギャラリー。まずは山小屋とのつながりを生かしたトークイベントを計画しているところです。山に登る人にも登らない人にも、街中で北アルプスの文化や自然に触れるきっかけをつくりたい。また、山小屋でアーティスト・イン・レジデンスのプログラムを2020年から続けていまして、これまで参加していただいたアーティストのといっしょにギャラリー展示を企画していく予定です。こちらもいろんな切り口で、山の文化や自然をめぐる視点に触れていただけたらと思っています。

浅田　私たちのお店はオープンしたばかりで試行錯誤中ですが、作品の展示＆販売は続けていきたいです。松本ではまだ知られていなくても、国内外で面白い仕事をしているデザイナーやアーティスト、ファッションの作り手を紹介できたらいいなと思っています。展示＆販売を通して松本に足を延ばしてくれたらうれしい。お店は小さいけれど、松本と世界をつなぐ窓のような場所になれたらと思います。

月元　うちも隔月ですが、以前から積み重ねてきた読書会は続けていきたいです。滅多にあることではありませんが、作家さんなどとお茶を飲みながら話す会を開いたんです。そんなことも続けていきたい。そして手伝ってくれている妻の企画で、新たな読書会も考えています。



この地図はまつもと市民芸術館付近の書店を表したものです。松本市には、まだまだたくさんの書店があります。



烟星堂古書店

［所在地］松本市浅間温泉3-29-4
浅三荘 一號室・二號室
［営業時間］月・火・水・金・土
20:00〜24:00（深夜営業）、
月・土・日11:00〜18:00（日中営業）
［定休日］木
［開業日］2026年５月１日



古書 てつのわだち

［所在地］松本市浅間温泉3-29-4
浅三荘 三號室
［営業時間］平日15:00〜19:00／
土・休日12:00〜19:00
［定休日］月・火　※12月中旬〜
翌年３月は不定期営業
［開業日］2026年10月２日



昭和33年築の木造アパートと浅間温泉の心地よさから生まれた古書店

松本市・浅間温泉の昭和33年築の木造アパート「淺三荘」に、二つの古書店が店を構えている。一つは、岡太一さんの「烟星堂古書店」。神奈川県出身の岡さんは、ブックホテル「松本十帖」への就職を機に移住した。「温泉街で学生街でもある浅間温泉に、地域に根付いた街の古本屋がないのは寂しい」と思う中で淺三荘に出会い、店を開いた。

「烟星堂」という屋号には、浅間温泉の夜空を見上げた時に浮かんだ、星と古本のイメージが重なる。「今見えている星も、すでに寿命を迎え残光だけが届いているかもしれない。亡くなった人が残した文章や、誰にも手に取られなくなった本と似ている」。深く雲に覆われ、埋もれつつある本にもう一度光を当て、星のような一冊と出会える場所にしたいという。

隣の「古書 てつのわだち」を営むのは、木祖村出身の太田岳さん。2016年から「しましま本店」として上高地線の電車や駅で古本を販売するなど、本を通じた交流の場づくりを続けてきた。店名は鉄道のレールをイメージして名づけた。子どものころに出会った本のある空間、上高地線での活動、そして今の店までが、一本のレールのようにつながっている。「ここで出会った一冊が、いつかその人の人生を振り返った時に、思い出や記憶に残る存在となれば」と話す。文庫本を中心に小説やエッセイ、ノンフィクションなど幅広い品揃えを心がける。

二人とも、浅間温泉という土地に魅力を感じている。共同湯や夜間入浴など、温泉が観光だけでなく暮らしに根付いていること。アララギ派とも縁があり、文化との親和性が高いこと。岡さんは「温泉との豊かな生活を更に広め、浅間温泉を本の街に」を、太田さんは「本のある場所に面白い人が集まり、新しいことが起きる」と期待する。偶然隣り合った二つの古書店。星のように時を越えて届く本と、人生をつなぐレールのような本。その小さな店から、浅間温泉に新しい文化の風景が生まれ始めている。

いまこそ書店という表現に出会おう

松本は人口約24万人。人口10万人あたりの書店数を地方都市と比較すると、全国でも有数の水準にある。特徴的なのは、チェーン書店だけでなく、老舗古書店、独立系書店など小さな本屋が街中に折り重なるように存在していること。旧制松本高等学校、信州大学や松本大学などの教育機関がそのベースを作ったのか、そもそも勉強好きな市民性がそうさせたのか。そしてここに来て店主自身の関心や美意識が棚に表れる小さな書店ができてきた。今回は６軒の店主に、「書店は表現なのか」を入口に、選書や店づくり、街との関係を語ってもらった。



むこうみね書店

小谷田裕美子｜むこうみね書店

山や自然を入口に、人文、芸術、文学へと広がる古本を中心に選ぶ。北アルプスの山小屋と街をつなぎ、偶然の一冊に出会える棚を目指す。

【所在地】松本市中央3-1-24　雲ノ平商店２階
【営業時間】日・月・水・木・金・土
12:00〜16:00、17:00〜20:00（金・土21:00まで）
※16:00〜17:00はクローズ
【定休日】火
【開業日】2026年６月５日



boccabooks

五十嵐ちなつ｜boccabooks

松本出身。県外での暮らしを経てUターンし、自身や家族の蔵書を出発点に開業。古本を中心に、暮らし、旅、文学、絵本、社会、自然などを並べる。新刊本や展示も交えた心地よい本の場所を目指す。

【所在地】松本市大手5-3-6
【営業時間】土・日9:30〜18:30、月・金11:00〜18:30（11月〜３月）
【定休日】火〜木
【開業日】2026年７月19日



gradation green
Graphics and Art in everything.

浅田文子｜gradation green

松本出身。東京でデザインなどの仕事に携わったのち、2026年４月に帰郷。夫婦で2026年８月に店を開き、デザイン、アート、ファッション、雑誌など、見て楽しむ本を中心に扱う。

【所在地】松本市中央1-27-22
【営業時間】月・火・土・日 12:30〜17:00
【不定休日】水（Instagramにて告知）
【定休日】木・金
【開業日】2026年８月27日



ブックスエコーロケーション

月元健伍｜ブックスエコーロケーション

新刊書店で17年働いたのち独立。SFを軸に、そこからつながる国内外の小説やエッセイを選ぶ。古本と新刊を組み合わせ、約2000冊に自分たちが面白いと思う世界を凝縮する。

【所在地】松本市女鳥羽1-1-11
【営業時間】月・木・金・土・日 11:00〜19:00
【定休日】火・水
【開業日】2024年11月18日

text : Koichi Imai



松本に生まれる４つの本棚

――お店を始めるとき、どんな書店にしたいと考えていましたか。

月元　僕は新刊書店で働いていました。当然自分が本当に勧めたい本だけを置けるわけではありません。だから独立するときは、好きな本を、自分の責任で手渡せる店にしたいと思いました。昔から好きだったSFを中心に、小説やエッセイを置いています。現在は古本が６、新刊が４という割合ですが、自分が面白いと思う世界を濃く詰め込めたらと考えています。

小谷田　私自身、昔ながらの街の古本屋に憧れていました。今の店舗は、学生時代から働いてきた北アルプスの山小屋・雲ノ平山荘との縁で、山荘が街に開いた「雲ノ平商店」という複合店舗の２Fにあります。山や自然の本を入り口として、そこから人間社会、芸術、文学へと広がるような棚を目指しています。何かビビッと来ていただけたらうれしいです。

五十嵐　私は実家が古本屋だったこともあって、Uターンで松本に戻るなら本屋をやりたいという気持ちがありました。開業時は私自身や家族の蔵書が中心で、暮らし、旅、文学、絵本、社会、美術など、幅広く様々な本が並んでいました。今は買取もしており、街の棚になっていくのだなと感じています。気持ちとしては、あしたの糧になるような本を置きたいと思っています。

浅田　私は都内で若いころデザインの仕事をしていました。一緒に営んでいる夫はクリエイティブディレクター／エディトリアルディレクターです。その関係でページを開いた瞬間に心躍るような本や雑誌を見てもらいたいと書店を始めました。デザイン、アート、ファッション、写真など、文字をじっくり読む本とは違う、ビジュアルの楽しさを伝えたい。８畳ほどの小さな店なので、友人の部屋に遊びに来るような感覚で見てもらえたら、と考えています。

――実際に店を開け、お客さんと接する中で、選書や店づくりへの考え方はどう変わってきましたか。

月元　仕入れの予算は限られています。入れたい本を全部ということはできない。でも制約があるからこそ、選書は面白くなっています。もちろんSFがどんどん動くわけではありません。ただ常連さんが増えたことで「この人なら、この本を面白がってくれるかも」とお客さんのことを考えるようになりました。どう工夫するかを考えるのが楽しいです。

浅田　今の若い人たちに、本という媒体の面白さを知ってほしいのです。印刷物の手触りだとか匂いだとかタイポグラフィやデザインの美しさを感じてほしい。そういう楽しみがあるのが実店舗の魅力です。

小谷田　私は「これは100％自分の表現です」とは、まだまだ言えないのですが、選書には思いや意図がある。書店という表現と街の古本屋としての機能のバランスをどうとるかを試行錯誤しているところです。そういう意味では、偶然の巡り合わせで仕入れた本があるお客さんには刺さったりする場面を見ると、とても面白いと思う。それはお店でなければわからなかった発見です。そういう毎日が刺激になっています。

五十嵐　自分の蔵書でスタートした開業時と比べて、今は自己表現という思いはあまり強くないです。新刊本を選んでいる時などはなくはないですが、その側面は強くないです。

月元　書店は完成した作品ではないですよね。棚の広さも限られているから、何を置くかはすごく考える。その意味では確かに表現です。でも、そこにお客さんが来て、会話をして、売れる本と売れない本があって、また棚を組み直す。ずっと編集し続けている。自分の表現ではあるけれど、自分一人では完成しないんだと思います。

浅田　スマホでは一瞬で情報が流れていきますが、本は手に取って、めくって、少し立ち止まること

はじめてのように見る

里山辺にある松本民芸館。今年、民藝に詳しい年上の友人を案内したことが新鮮だった。その２人はまるでショールームを見るみたいに民芸館を楽しんでいたからだ。「この箪笥いいね」「自分の家の採光をこんなふうにしてみよう」最後には「この照明はどこで買えますか？」そんなこと聞いて良いんだと目から鱗だった。また、彼女たちと陳列の面白さについて話した。ここには沖縄の絵皿の横にアイヌの着物や、例えば「馬」とだけ書かれた木の置物などがランダムに並ぶ。私のお気に入りは張子で出来た「相撲取り」人形だ。いま十両にいるあの力士に顔が似ているし、素朴で面白い形にほっとする。昔の子供はこれでトントン相撲を遊んだのかもしれない。



これらの物を集め松本民芸館を作ったのは丸山太郎。民芸研究家であり、自身も絵を描いたり螺鈿細工を作ったり、中町の「ちきりや工芸店」を開いたことでも知られる。「美しいものが美しい」と掲げられているように、その作品がどこで誰に作られ、幾らの価値があるというような知識でものを見るのでなく、自分の直感で鑑賞することが大事だと語る。だから展示品への説明は必要最小限、木札の名前だけが記されるのだ。



私にとって里山辺は高校まで過ごした身近なエリアなので、この重厚感ある民芸館の窓から馴染みの風景が見えることをいつも面白く感じる。「今見マセ　イツ見ルモ」とは、何事においても今初めて見るという思いで向き合うこと。これまでも行く度に少しずつ発見があった。今度は雑木林のようなあの庭の四季の変化も見てみたい。







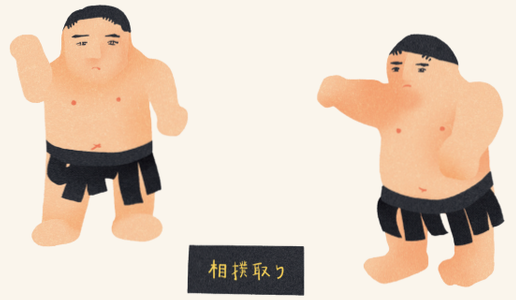




Illustration & Text

otama

太田真紀／イラストレーション、ビジュアルストーリーテリング、またそれらを軸としたデザインなどが得意。デザインファーム・Takramでの勤務を経て、2021年４月よりイラストレーターとして独立。松本に住んでいますが、まだまだ知らないことばかりです。

otama-ki.com

［特集］

いまこそ書店という表現に出会おう

vol.
11
2026
Autumn

ねこまち



まつもと市民・芸術館
Matsumoto Performing Arts Centre